

自分らやる子にするために



DATA FILE

データをヒントに!

「自分から!」を育むかぎは家庭環境にあり

「自分から進んで勉強する子」が育まれる家庭環境や保護者とのかかわりには、どこか共通項があるようです。最新の調査結果からそのヒントを探ってみました。

DATA ① 保護者が子どものノートに目を通す 家庭の子どもは、学習時間が長い!

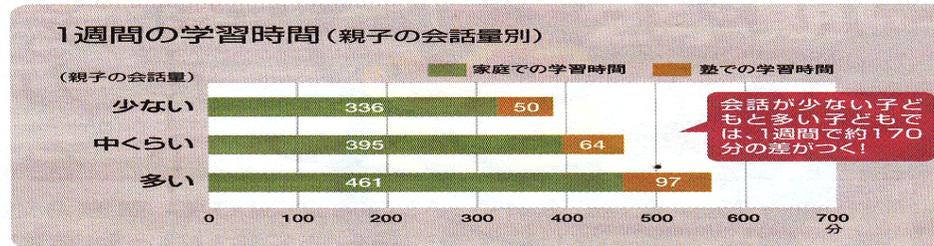
子どもの平均勉強時間(学年別×保護者の学習へのかかわり別)



※ベネッセ教育研究開発センター 第3回「子育て生活基本調査」(2007年度)

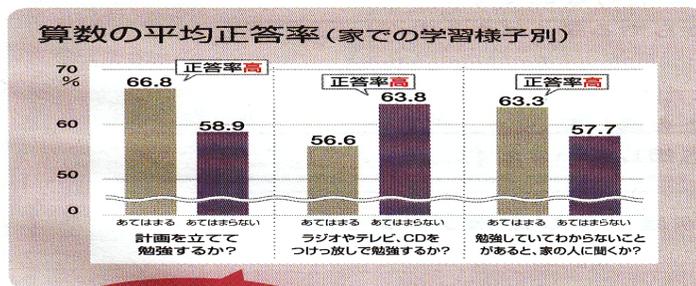
学校や塾のノートに「目を通す」保護者と「目を通さない」保護者とでは、子どもの家庭学習の時間に開きがあることがわかります。小4生から小6生にかけては、「ノートに目を通す」のと「通さない」のとは、子どもの学習時間が実に約30分違ってきます。学年が上がるにつれて、子どものほうから「わからないから教えて」とは言ってこなくなるため、「勉強しなさい」と言うだけの保護者が増えがちです。しかしノートに目を通すことで、子どもの学習内容やつまづきを発見することができ、それが子どもの学習意欲の向上にもつながっていきます。

DATA ② 会話が豊かな家庭の子どもは、学習時間が長い！



DATA②は、「学校のでできごと」「勉強や成績のこと」「将来や進路のこと」「友達のこと」「社会のできごとやニュース」などの話題を、親子の間でどれくらい話しているかをたずねたもの。その結果、親子の会話量が多いほど、長い時間を学習に費やす傾向が読み取れます。親子の会話は、子どもに精神的な安定をもたらすだけでなく、学習の価値や目標を考える機会にもなります。保護者が子どものノートに目を通すことに加えて、家庭での会話も子どもの学習に強い影響を与えていると考えられます。

DATA ③ 学力が高い子は、「勉強する習慣」と「勉強が進む環境」がある！



家庭での保護者のサポートが不可欠!

「自宅で計画を立てて勉強する」、「勉強していてわからないことがあると、家の人に聞く」に「あてはまる」と答えた子どもは平均正答率が高くなっています。反面、自宅で「ラジオやテレビ、CDをつけ放しで勉強する」子どもは、平均正答率が低くなっています。計画的に家庭学習をする習慣と保護者のサポートがあり、テレビを消すなどの家庭学習に適した環境が整っていることは、小学生の学力アップの大切な要素になっているようです。

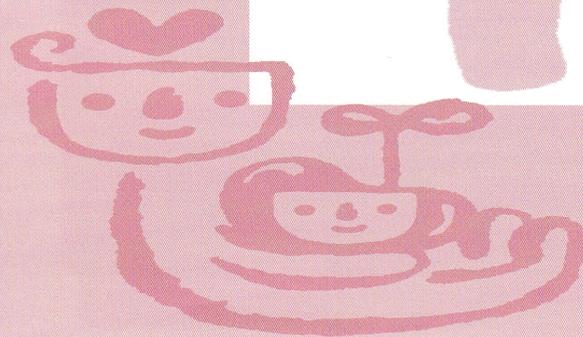
低学年のための

1・2年

家庭でできる

7つの法則

低学年の子どもにとって、保護者は「絶対的」で「必要不可欠」な存在です。そして、保護者から認められ、「自信」をもらうことで、人間全体への基本的な信頼感が養われ、好奇心や精神的安定感が成長させていきます。そのような子どもの発達に合わせ、親子で一緒に「好き」を探するなど、さまざまな体験をし、子どもの中の可能性を広げていきましょう。子どものよくできている点やがんばったことは、大いに承認し、自信をもたせることが肝心です。



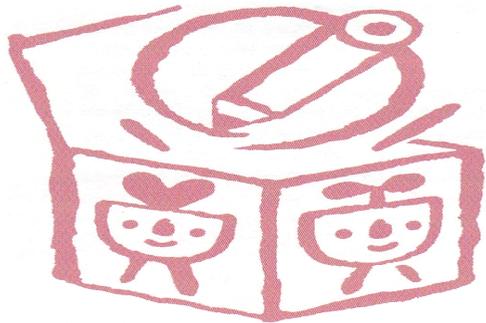
1 「まるつけ」に極意あり

勉強ができたら、大きなまるとほめ言葉を

学習意欲をつくるうえで、低学年はとても大切な時期。「勉強がいやなもの」にならないよう、家庭学習では「おうちで勉強をした!」だけでもほめて、子どものやる気をアップさせてあげましょう。そしてドリルや課題ができたら、大きな大きなまるや100点マークなどをつけてあげます。まちがいがあった場合は、あとで消せるように鉛筆で小さく×印をするなどして、やる気を消失させない工夫も大切です。

1回ごとに完結する

まるつけをすると、子どもは大喜び。関係のない用紙を持ってきて「ここにもまるして!」と催促され、遊びになることもあるでしょう。そこで「何かをしたから(できたから)まるつけをする」という因果関係を、言葉と態度で示しましょう。「次のページまでやったら、またまるつけするから見せてね」と告げて、子どもを見守ります。目標を決める。それを達成したらまるつけをする…。このメリハリをつけることが大切です。



まるつけは、 スピードとタイミングが勝負! (大阪府 小2男子 おやびんさん)

わが家では、子どもが勉強机に向かった状態のまま、ドリルや宿題にまるつけをするようにしています。一度立ち歩くと集中力が途切れ、私のまるつけを見なくなるからです。答えが合っていたら「せいかーい!」などと言いながら、大きな花まるやデンデン虫まるなどを書き込み、まちがっている箇所は「あれ?あれれ?」と言って注目させます。低学年の花まるの極意は、スピードとタイミングにあるんじゃないかしら?

2 まちがえたあとの 対応で差がつく

「なんでできないの？」は ぐっとこらえて

できなかったときこそ、やるべきことがあります。それは怒らないこと。保護者からの勇気づけでやる気を出すのが子どもなら、否定的な物言いでやる気を失うのも子ども。低学年の勉強は大人から見ると簡単ですが、子どもにとっては初めてのことだらけ。中学年になると自分で答え合わせをして、「何がいけなかったか？」を考えられるようになりますが、低学年ではまだちょっと無理。「どう考えたのだろう？」と子どもの立場で一度考える「余裕」をもちましょう。



まちがいの原因に気づくまで根気よく

(兵庫県 小2男子 ぼんさん)

うちの子は、まちがうと泣いたり怒ったりするタイプ。特に小1のときは、その傾向が強かったです。でも根気強く「わからなかったところをわかるようにするのが勉強なんだよ」と言い聞かせました。そして「これはまちがえているけれど、どうしてだかわかる？」と、子どもがその原因に気づくまで一緒に考えるようにしています。確かに時間はかかりますが、理解できたときの「わかった!」と喜ぶ顔は格別ですよ。

3 くり返して覚える

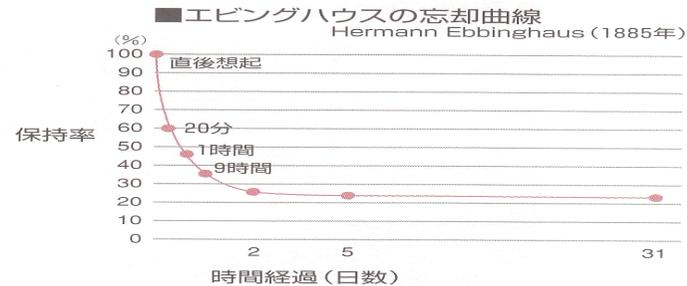
人間の記憶力は2日間？

人は「忘れる」生き物です。下のグラフは「忘却曲線」と呼ばれ、時間がたつにつれて記憶したことがどのように忘れられていくかを示したものです。これを見ると、記憶したことの70%が2日後には忘れられてしまうことがわかります。忘れることに歯止めをかけるには「反復学習」しかありません。思い出しては覚える、覚えては思い出すをくり返すうちに、長期記憶の「引き出し」にその記憶は入れられ、身についた知識・実力となっていくのです。低学年は覚えることを「賢くなった」と感じ、あまり抵抗がありません。楽しく「反復学習」する工夫を家庭で考えてみましょう。保護者にはほんの些細なことささいなことと思っけていても、子どもにとっては覚えた実感が達成感なり、次のやる気につながります。

解答欄に紙をはって、
くり返し勉強しています

(埼玉県 小1男子 ゆるるさん)

どんなドリルをやっても、息子はゲーム感覚。不正解が多くても、一度終わると二度と同じページをやるうとしませんでした。そこで、解答欄に紙をはって以前の書き込みを見えなくしたところ、また問題を解くようになったんです。こうすると反復学習になるし、私も何度もまちがえている部分がわかります。紙がはれない問題は、答えを別のノートに書くようにしています。



「グラフィック学習心理学—行動と認知—」より

4 国語の楽しみは 言葉にあり

「読み・書き」から
「論理的思考・表現」へ
五感を使って日常生活の中から
身につける

日本言語技術教育学会会長 市毛勝雄先生

これからの日本はますます国際化が進み、外国からの文化や情報の流入も増える一方です。そのためにも、自分の意志を適切に表現することや、相手の話を的確に理解すること、つまり「お互いに伝え合う力」を高めることが、今まで以上に必要とされています。学校でもこれらのことを受けて、「読む・聞く」といった「受信型」の授業だけでなく、「伝え合う」ために大切な「論理的思考力・表現力」を育てる「発信型」授業も取り入れるようになりました。小学6年間を通じて、音読・朗読・説明・スピーチや討論といった「音声による言語学習」と、記録や報告・小論文などを読んだり書いたりする「文字による言語学習」が、学年ごとの発達段階に応じて実施されています。

中でも「音声による言語学習」は大切です。低学年では、あいさつ・音読・読み聞かせ・口頭作文といった「五感」を使う学習で、伝え合いの基礎となる「話す・聞く」を養います。特に「あいさつ」は基本中の基本学習です。家庭でも意識して、あいさつを励行しましょう。他にも天気予報を見て語り合うことは、過去のデータを積み重ねて推論する「帰納論理」を、囲碁や将棋やトランプなどのゲームは、命題を組み立てて推論する「演繹論理」を育てるのに有効です。自分の「言葉」を自在に扱えるようになることが「国語」の目標であり楽しみです。「へりくつ」を言うのも論理的思考力や表現力が育っている証拠と前向きにとらえて、子どもの国語力アップをサポートしてください。

5

数に対する「感覚」を身につける

算数は「積み重ねの教科」といわれ、勉強したことを理解できないまま次に進むとつまずいてしまい、結果として「算数嫌い」になりがちです。そこで低学年のうちから、数に対する「感覚」を身につけ、算数的思考力を養っておきましょう。特に家庭では「会話」による反復学習が効果的です。例えば「 $1+7=8$ 」、「 $8-7=1$ 」と続ける計算しりとり。頭の中で考えるということは、紙に書かれた問題を解くよりも難易度が高く、理解力が深まります。他にもオセロやトランプ、サイコロゲームを楽しんだり、買い物に行ったときに「このお菓子を3個買ったらいくら?」と、自分で計算式をイメージさせるのもいいでしょう。

算数の楽しみは イマジネーションにあり



応用力のつく「お話」出題方式

(熊本県 小1男子 一期一会さん)

計算問題の数をこなすのも確かに大切ですが、ひたすら解いていたら飽きちゃいますよね。うちではそんなとき、式をもとにした「お話」を息子につくらせることがあります。例えば「 $10+8=?$ 」という問題があったら、息子が「ケーキが10個あります。さらに8個もらいました。さてケーキは全部で何個でしょう?」というお話問題をつくるのです。息子にとっては「先生ごっこ」ですが、式の意味がわからないと問題をつくることはできません。応用力もつくと思います。

6 生活の中で学ぼう

家庭で伸ばす/
自分からやる子にする
15の法則

「知りたい」気持ちを大切に

子どもの生活や遊びには「なぜ?」「どうして?」がいっぱい詰まっています。このような「知りたい」という意欲は、子どもの“伸びる力”を根底で支える“かぎ”になります。保護者は、この気持ちを尊重し、一緒に考えたり調べたりして、上手にサポートしてあげてください。

社会への興味は「見て考える」ことから

(岡山県 小1女子 penchanさん)

ハイキングに行くときは、自分たちの歩いた道に印をつけたり、地図と景色を見比べたりしています。他にも工業地帯のそばを通れば「どうして海の近くに工場があるんだろう?」と問いかけたり…。その場ではわからなくても、あとで授業で習ったとき「このことをお母さんは言っていたんだ!」と気づいてくれればいいと考えています。こういった「見て考える」体験をたくさん積むことで、社会への興味が出るのではないのでしょうか。

知る喜び、発見する喜びを邪魔しない

元小学校校長・Benesse教育研究開発センター顧問
深海龍夫先生

科学は「どうして?」と考え、自分で調べて解決していく学問ですが、これはよりよい人生を送るために必要な「問題解決能力」を養うことにもつながります。特に低学年は、たくさんの「?」を抱いてほしい時期。「どうして磁石はくっつくの?」と考え、いろいろなものをくっつけて調べてみる。保護者がここでN極とS極の理論を先回りして話してしまうと、子どもの「?」もそこで止まってしまいます。理論は3年生になったら習います。その時期までは保護者も「本当に不思議だね。他にどんなものがくっついた?」などと、ヒントを出すようにするといいでしょう。教えられて知るより、自分で発見するほうが、本当の「科学の力」は蓄えられていくのです。



7 親も何か勉強する

ただそばで読書しているだけです…

(長崎県 小3男子・小6女子 きあらさん)

子どもに「勉強しなさい」と言うのは簡単ですが、自分が逆に子どもだったら、そう言われてもやる気になりませんよね。そして、子どもが約束の時間に勉強しないのは、その時間を私が自由に過ごしているからかも…と、思い立ったんです。そこで、時間になると私も子どもも同じテーブルに向き合い、読書をするようにしました。こうやってそばにいても、取り組む意欲が違ってくると感じます。わからないところがあると、尋ねてきやすいみたいです。

子どもと一緒に調べものをして勉強中

(埼玉県 小1女子 mim12さん)

「これはどういう意味(こと)?」と子どもに質問されたことについては、それがわかる資料や図鑑を図書館で借りてきて、一緒に調べ、理解するようにしています。私自身、忘れていたことや知らなかったことが多く、新しい発見があると子どもと大喜びします。子どもにもそういう気持ちが伝わるようで、調べものが好きな子になっています。これからも彼女の目線に立ち、「どうして?」に向き合い、共に勉強していこうと思います。



親の学ぶ姿が子をやる気に…?

(神奈川県 小1女子 ざりがにさん)

子どもには自主的に勉強してほしいと願っていますが、最初からそれを期待しても無理なので、今は勉強時間を決め、その時間は親も何かしらの勉強をすることにしています。そして子どもの様子を見ながら、できたらほめる! さらにはすかさず「明日もがんばろうね!」と励まします。最近は「今日もお勉強しようよ!」と言うことが多くなりました。

中学年のための

3・4年

家庭でできる

5つの法則

保護者の「先に勉強しなさい」より、友達との約束を優先するようになるのが中学年。親のほめ言葉よりも「友達」から認められることが、自信につながります。とはいうものの、交友関係や自分で立てた計画などが「うまくいかない」と、まだ自力で解決する術を知らず、保護者を頼ってくることも。保護者は、このような子どもの発達的变化を理解し、良きフォロー役になりましょう。学習面では苦手を一緒に見つけたり、それを克服するために勉強法を見直すといったアプローチが大切です。

8

「なぜわからないか」を見極めよう

わからないところを理解・自覚する

中学年になると、自分を客観視できるようになると共に、他者との比較もするようになります。そして「自分は〇〇くんより算数ができない…」などと、自分で自分に評価を下しがち。こういったときこそ保護者の力が必要です。ただ「苦手なんだ」で終わらせず、「どこが苦手なのか」「なぜわからないのか」を見極めましょう。中学年からの勉強は抽象的な内容が多くなり、本当の意味での理解が不可欠です。自分にわかっていない部分があることを理解・自覚し、それをわかるようにする。このくり返しにより、本当の学力がついていくのです。

まちがえたから、いいんだよ

(山梨県 小3女子 キティーさん)

テストなどでまちがえた部分こそ勉強し直してほしいのに、子どもって面倒くさかったり、プライドが傷ついたりして、あまりやってくれませんよね。これって「まちがえることはいけないこと」と子どもが考えてるからなのでは？ うちでは娘に「まちがえたほうが印象に残ってよく覚えられるよ」と言うようにしました。そうすると、まちがえたことを否定的にとらえず、理解してみようとかんばれるみたいです。



9

「手をかける」から 「目をかける」にシフト



まずは、学習習慣の 定着だけを考えて

中学年になると、子どもは保護者がつきっきりで勉強を見ることをいやがります。かといって、いきなり放任すると、子どもはどうしていいかわかりません。そこで保護者は、直接行動から間接行動に作戦変更。机まわりを整え、時間がきたらそこに座るという「約束」だけを交わします。学習内容は得意な科目ややさしい内容でOK、時間も集中力の持続する30分程度から。とにかく学習習慣がつくような環境づくりをまずはめざしましょう。そして勉強を見るというよりは、勉強する姿を見守ることが大切です。

登校前の30分を習慣化!

(愛知県 小3女子 マルちゃんさん)

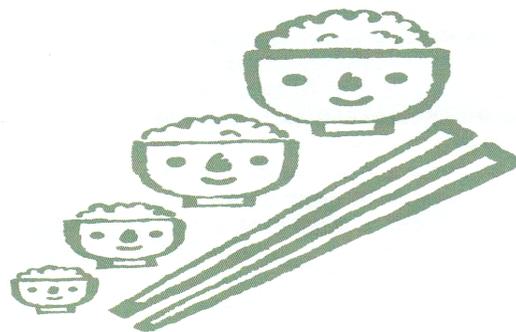
わが家では朝、勉強するようにしています。学校から帰ってきてからはだらだらしてしまうので、30分早く起こし、すべての準備を終わらせ、テレビを消して、リビング(親の前)でやるようにしました。学校が休みの日は勉強もお休みにしています。必ず同じ時間に、同じようにしているうちに習慣化したようで、今では特に何も言わなくても、勉強するようになりました。

10

会話が育む相互理解

成長するにしたがって、子どもは自分だけの時間を大事にするようになり、家族とのコミュニケーションが減っていきます。だからといって、そのままにしているのはいいことではなく、短時間でも密度の濃い会話をすべきです。食事タイムこそ、そのチャンス。会話を楽しむためにも、テレビは消して家族全員で食卓を囲みます。会話を通して、子どもは保護者が自分のことをちゃんと考えてくれていると感じるはず。そのことがわかればこそ、子どもは安心して夢を描いたり、目標をもつことができるのです。保護者にとってもまた、子どもが今、何に興味をもち、どんなことを悩んでいるかがわかります。

食事は家族そろってテレビを消して



日曜日の夕食はメニュー決めからみんなで

(神奈川県 小6男子 すずらんさん)

日曜日だけは必ず家族そろって食事をするようにしています。何を食べるかを決めるところから家族全員で。もちろん買い物や調理にも、どんどん参加してもらいます。材料選びからかかわっているのも、子どもたちは食べ物や自然への興味関心が高まるし、食卓の話題にも事欠きません。気持ちよく食事を楽しみたいので、小言は絶対言わない約束。すると、進路のことから好きなマンガのことまで、逆になんでも話してくれるようになりました。

11 決して崩れない 「土台」をつくる

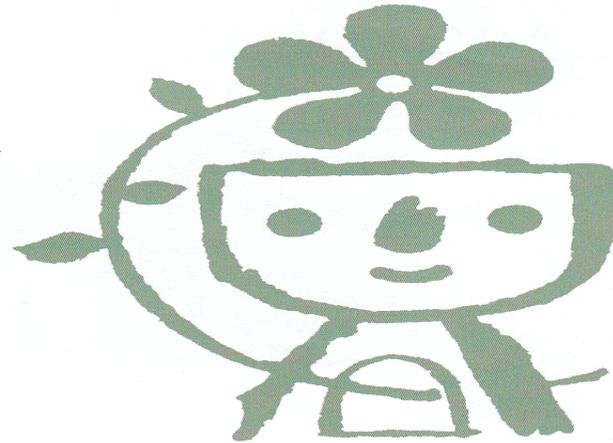
大切なのは、「基礎」

例えば算数では、計算の基礎となる四則計算を3年生までに学習します。つまり、ここでいう「基礎」とは、3年生で完全に四則計算を理解し、解けるようになっていくことです。基礎が定着しないまま、いくら応用問題をやらせても意味はありません。中学年の学習の最大のポイントは「基礎を完全に身につけること」。応用・発展も大事ですが、このことだけは忘れないでください。また、算数に限らず、すべての教科の基礎は4年生までに学習します。計算が速いから、習った漢字が正しく書けるからと気を抜かず、ときには前の学年の内容を復習することも大切といえるでしょう。

読書や博物館見学も 立派な応用

(神奈川県 小4男子 SACHIKOさん)

4年生になった途端、息子の友達が続々と塾に通い始め、「そんなに学校の勉強が難しくなったの?」と焦ったことがあります。でも教科書を開いてみたら、まだ私が教えてあげられる範囲内だったので、とりあえず塾には行っていません。発展的な内容は、本を読んだり、博物館に行ったり、ネットで調べものをするので学んでいます。こんな感じでも学校の勉強は遅れていないし、先生も「よく手が挙がっていますよ」と言ってくれます。



12



遊びでの経験が、 考える力を育む

カラダを動かさないと頭も動かない

中学年はギャングエイジと呼ばれるように、友達との仲間意識が発達し、そこで人間関係を学んでいく時期。そんな時期だからこそ、友達と思いきり遊ぶ経験は心身の成長に大切です。そして遊ぶことは、自分たち独自のルールを編み出すなど、考える力を育むことにもつながります。たっぷり遊んだあとは、しっかり勉強…と、生活にメリハリをつけることも、学習習慣を身につけるのに大切なポイントです。

よく遊ぶと、よく学べるみたいです

(神奈川県 小6女子 私の青空さん)

うちでは中学年以降はずっと、17時までが遊びの時間。そして夕食までが勉強の時間です。宿題が多い場合は夕食後もやる場合もあります。友達と遊んで帰ってくると、勉強もはかどるようですよ。逆に「今日は遊ばないで勉強なさい」と言った日は、結局何をしてもはかどりません。生活にメリハリをつけるためにも、遊べる日は遊ばせてあげるようにしています。

高学年のための

5・6年

家庭でできる 3つの法則

習い事の先生や先輩など、保護者や同年代の友達以外の人たちからの影響が高まるのが高学年。また、自分をほめる・励ますといった「自己強化」ができるようになり、自分は何者なのか？ の模索も始まります。これらは、子どもが「他者依存」から「自己主導」に変容したから。保護者は、そんな子どもの自立への姿勢を邪魔することなく、でも寄り添って歩くことが大切です。そして、子どもと一緒に考えたり、将来の夢と学習の意味を関連づけるなど、論理的な助言を心がけましょう。



13

「何のために勉強するの?」に
きちんと答えたい

正解はないけれど、 答えなければ!

最近の調査で、子どもの学習意欲の低下が話題を呼んでいます。その大きな理由の1つは、将来への展望が見えず、学習する意味が見いだせないことにあります。がんばって一流大学→大企業と進んでもリストラされる「現実」を子どもはよく知っており、勉強しても無駄かも…と感じているのでしょう。だからこそ大人は、何のために勉強するのかを、きちんと伝える義務があります。あなたのお子さまが「何のために勉強するの?」と質問してきたら、ちゃんと答えられますか? 正解はありません。でも、そのとき自分なりの考えや答えを与えられるかどうか、この先お子さまが伸びるかどうかを決めるといっても過言ではないのです。

やる気になるとき Best5

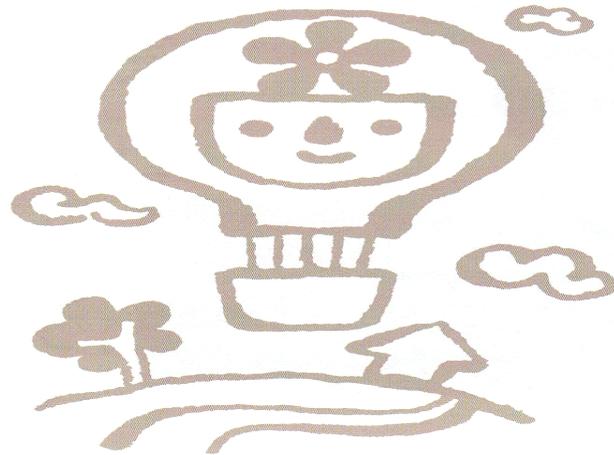
【小学校】

1位	授業がよくわかるとき	95.2%
2位	先生にほめられたとき	94.6%
2位	授業がおもしろいとき	94.6%
4位	クラブ活動などに一生懸命取り組んでいるとき	94.2%
5位	仲のよい友達ができたととき	93.5%

【中学校】

1位	授業がよくわかるとき	94.0%
2位	授業がおもしろいとき	91.8%
3位	将来つきたい職業に関心をもったとき	90.5%
4位	成績が上がったとき	87.1%
5位	将来行きたい学校がハッキリ決まったとき	86.8%

▲平成12～13年度調査「学習意欲に関する調査研究」(国立教育政策研究所)



考え方やものの見方を学ぶため

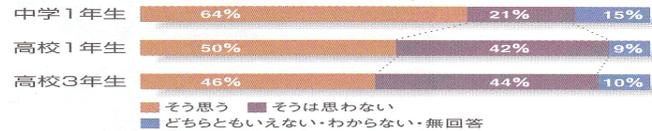
(埼玉県 小4女子 ちふゆさん)

自分も子どもの頃、勉強する意味を疑問に感じていました。今になって思うのは、勉強とは知識を身につけることはもちろん、理論的思考法や自己コントロール法など、広い意味での「学び」であるということ。大人になると使わなくなる知識も多いけれど、考え方やものの見方が生きていくうえで役立っています。勉強嫌いの娘に「普通の主婦になるのに、なんで勉強するの?」と聞かれると、やさしい言葉で以上のようなことを伝えています。そして「今はなりたいものがないかもしれないけれど、中学や高校になって新しい夢ができたとき、今勉強しておいたほうが可能性が広がるよ」とも話しています。

家庭で伸ばす/ 自分からやる子にする 15の法則

なぜ勉強しなければならないのか

一生懸命勉強すれば、将来よい暮らしができるか



▲「中高生はなぜ勉強しなくなったのか～中高生の生活と意識調査から～」
2002年 NHK放送文化研究所

子どもに合った説明も大切!?

(東京都 小5男子 チップ・アンド・デールさん)

「あのね、脳にはシナプスという情報を吸収する細胞があって、情報がくると細胞同士が手をつなぐの。そして、同じ情報が何度も入ってくるとシナプスの結びつきはさらにしっかりとしたものになって、脳の密度がどんどん濃くなるんだ。子どもの頃に結びついたシナプスは年をとってもほどけないから、いちばん吸収力のある今、勉強しておくことは大事なんだよ」。息子は理数系ほいので、この説明で納得しました。



ゲームのように競争しています (沖縄県 小5男子 mintoさん)

子どもより少し勉強のできる友達と一緒に勉強させるようにしています。よくできたほうに、ごほうび(おやつ)をあげたり、大げさにほめるようにすると、ゲームをやっているかのようにがんばるし、競い合います。勉強が終わったあとは思いきり遊んでいい時間に。勉強も遊びも、良きライバルって感じです。これからもこの調子で切磋琢磨してね!

14 「あこがれ」と 「ライバル」は必要

目標をもつと、勉強への動機づけがはっきりする

自分のことを相対的に評価するようになるこの時期、子どもは「他者と自分の関係」について真剣に考え始めます。そして、あの人のようになりたい・こんな仕事につきたいという現実的な「あこがれ」や、あいつには負けれないという、いい意味での「競争心」が生じるように。このような「目標」をもつことは、学習面においても強力な動機づけとなり、単純な計算練習にさえ、その意味を見出すことにつながります。保護者は、あきらめようとしたり、うまくいかないときに、目標を思い出させ、そのためには何をすべきか? といった問いかけをするように心がけましょう。

15

できる子は
「予習」をしている

予習はまちがえてもいいんだよ

(千葉県 小5男子 みーママさん)

うちでは学校の授業の前に予習をしています。そうすると「学校の勉強がよくわかるし、発表ができてうれしい」と自信につながっているみたい。本人には「予習だからまちがえてもいいんだよ。わからないところを知って、理解するためなんだから」と言うようにしています。

高学年以降の勉強のコツ

学習内容の難易度が急激に上がる高学年からは、おさらいを一度する程度では、なかなか実力が身につきません。この時期以降「予習」をすることは、学力をアップするのに効果的な方法となります。予習は復習と比べて、子どもの勉強への自主性がさらに問われる学習習慣。慣れるまでは大変かもしれませんが、成績が良くなれば自分のやってきたことへの自信にもなるはず。保護者は予習の必要性・有効性を、一度子どもと話し合ってみてはいかがでしょうか。

授業とは別内容の家庭学習を

(三重県 小5女子 ピーターラビットが好きさん)

学習スケジュールを自分で立てて勉強するようになったのは4年生の頃からでしょうか。市販の家庭学習教材を使っていることもあり、最近は学校の進度にかかわらずスケジュールどおりにこなすようになりました。結果として予習型になっていますね。高学年になったら、学校の授業進度と家庭学習は、切り離しても大丈夫なのではないでしょうか。「自分で考える」学習をする意味や良さをアドバイスすれば、ちゃんと理解してもらえますと思います。

